

戦後ロンドンの文化政策建築：

—テムズ川沿いの公営文化施設における記憶と表象—

氏名 照井敬生^{*1}

概要 本研究の目的は、政府による芸術文化支援（文化政策）の一環として建造された建築物が及ぼした文化的・歴史的な影響について、建築物の表象と記憶に着目した調査を通じて明らかにすることである。特に、戦後イギリスにおいて隆盛した建築様式である「ブルータリズム」に着目し、これらの建造物の文化的位置付けおよび今日における保護・再評価運動の背景とその問題点を明らかにする。第一に、戦後当初から賛否両論を巻き起こしたブルータリズム建築が、21世紀以降に美化・再評価された経緯を明らかにする。その上で、こうしたブルータリズム建築の再評価は、当初の論争的性格や労働者階級向けの建築文化の模索といった理念を忘れ、集合住宅の住民や利用者の視点を欠いた文化財保護論が展開されている点を指摘する。さらに、テムズ川沿いのブルータリズム建築、とりわけロンドンの顔として取り上げられ、ブルータリズム建築の最高傑作ともしばしば評されるナショナルシアターの表象を分析することで、ブルータリズムの理念や表現が同施設から切り離され、サウスバンクの富裕層向け文化施設や演劇文化のイメージとして取り込まれていることを視覚的に明らかにする。

研究背景と目的

ブルータリズム(Brutalism)建築とは、第二次世界大戦後のイギリスにおいて隆盛した建築様式であり、特に1950-70年代初頭にかけて流行した。モダニズム建築様式のサブカテゴリーとして理解されるブルータリズム建築は、建築素材の物質性・質感・構造を前面に打ち出す点に特色であり、建築物の「内臓」を容赦無く人目に晒すような、「グロテスク」とも評される建築の集合である。こうしたブルータリズム建築は、その雄渾さや訴求力を認められる一方で、美醜の判断を揺るがすものとして、その評価は常に論争的なものであった。

画像1: Brunswick Centre, Patrick Hodgkinson, 1966-71. Photography:

Simon Phipps

(from:

<https://bluecrowmedia.com/blogs/news/brutalist-architecture-in-london-today>)



ブルータリズム建築が戦後のイギリスにおいて台頭し、今日にも広く見受けられる

ようになった背景として、集合住宅や大学など公共部門主導の建築において盛んに取り入れられたことが指摘できる。加えて、本研究が着目する政府による芸術文化支援（文化政策）の一環として戦後に建築された主要文化施設もまたブルータリズム建築様式を広く取り入れた。具体的な事例としては、ロンドン中心部にあるバービカンセンター、テムズ川沿いのサウスバンク地域に立地するナショナルシアターやサウスバンクセンターなどを挙げることができる。戦後イギリスにおいて、民間営利企業ではなく公共部門からむしろ論争的かつ挑戦的な建築が造り出された点に、戦後イギリスの特色がうかがえる。

本研究の目的は、こうした戦後イギリスにおける論争的な建築様式であったブルータリズム建築がいかにして記憶され、表象されてきたのかを論じることにある。これによって従来の文化政策研究において見落とされてきた「建造物」に対する評価を行うための分析枠組みを確立するとともに、今日なお評価が定まらないブルータリズム建築文化に対する記憶を通史的かつ批判的に再検討することを目指す。

筆者が専門とする文化政策研究において建築物の分析は先行研究における死角・課題となっており、その点で本建築文化研究は意義深く、また独自の貢献が期待される。文化政策研究においては、伝統的に文化施設の建築を以て成果とする「ハコモノ行政」とそれに対する研究者、芸術文化関係者からの批判が強く、いきおい人や活動を対象とする研究が目立ち、建築物については十分な議論がなされてこなかった。また、近年の研究の動向として、より人や活動に力点を置いた「空間論的転換」の分析枠組みが精緻化することで、建築物そのものの描写を越えた文化活動と文化政策、都市論に関する議論が発展していった。しかしなが

ら、本研究が明らかにするように、文化政策における建築の研究は、芸術文化やクリエイティブ産業といった「狭義の文化」とどまらず、文化人類学・カルチュラルスタディーズが焦点を当てるところの「人間の生き方全般」に関する「広義の文化」を射程に収めるものである。また、代表的建築を通じた国民文化や共通文化の形成は文化政策の最も根本的な目的の一つであり、そうした役割を担う建造物の分析は文化政策研究の取り組みとして不可欠である。

本研究の分析に際して用いる資料として、ブルータリズム建築に関する一般書およびメディア記事に加えて、史料としての建築専門雑誌、一般雑誌・新聞のアーカイブと、文化政策および都市計画に関する公文書を用いる。加えて、ブルータリズム建築が今日の文化においていかに表象され、記憶されているかを参照するために、英国を舞台とした映画・テレビなどの映像資料をBritish Film Institute 図書館で収集し、分析を加えた。

以下では、ブルータリズム建築様式全般に対する評価・記憶・表象を資料調査から明らかにしたうえで、事例研究としてテムズ川沿いの文化施設、特にバービカンセンターとナショナルシアターの対照的な文化的位置付けについて論じる。

研究成果と考察

ブルータリズム建築の代表的評価

ブルータリズム建築に関する史料調査を行い、それが時代とともにどのように変化していったかを概観していくと、この建築様式に対する評価が常に流動的かつ論争的であったことが確認できる。一方では、この建築様式が体現していた未来志向の画期性を評価し、その表現の先端性を認める言説が、建築雑誌や建築家コミュニティの間で認められた。他方では、「原子力発電所のよう醜い」と評する新聞・雑誌記事や、材

料の質感を前面に押し出した様式を「安っぽい」とする評価も広く見受けられる。特に、建築素材としてのコンクリートとそれによる「灰色」の色彩が 1950 年代から 80 年代にかけて頻繁に言及された。代表例としては、1988 年に The Times 紙上に掲載された”A change of image for the concrete city”という記事が挙げられる。近年、特に 21 世紀以降、ブルータリズム建築は高く評価され、保護すべき芸術文化として捉えられるようになった。こうした世紀転換点におけるブルータリズム建築的なものの再評価の先駆けとして、発電所の再建によってテムズ川沿いに造られ、現在では同地区の顔ともなった Tate Modern の人気を想起することは容易であろう。

ブルータリズム建築の文化財保護運動

ブルータリズム建築は、公共住宅や文化施設に幅広く取り入れられたものの、近年では施設の老朽化を受けて、取り壊しや再建の議論が盛んに行われている。2013 年 3 月に The Times 紙上で掲載された”Be brutal: rebuild the Southbank Centre”と題した記事に特徴的なように、本来は荒々しい様式美を称えるために用いられた brutal という語を転用して、「意を決して取り壊すべし」という標語として転用されている点にこうした運動の妙味がある。

これに対して、論争的で従来は高く評価されてこなかったブルータリズム建築を重要文化財として位置づけ、その保護を呼びかける「文化財保護運動」も近年では盛んに行われている。Barwood, E. & Davies, J. O. (2015). *England's Post-War Listed Buildings*. Batford Ltd.; Hopkin, O. (2017). *Lost Futures: The Disappearing Architecture of Post-War Britain*. Royal Academy of Arts. Philips, S. (2016). *Brutal London*. September Publishing. といった、ブルータリズム建築のカタログや書籍の出版はこの好例である。

しかしながら、こうした文化遺産としてのブルータリズム建築保護運動にはいくつかの明確な問題があると筆者は考える。第一に、労働者階級向けの公共建築として供されたはずのブルータリズム建築が文化遺産として認定されることで、公共住宅の住民や文化施設の利用者といった当事者の意向が無視された形で建築の礼賛と保護が進められている。例えば、Canary Wharf 地域におけるブルータリズム建築保護運動では、住民の 8 割が老朽化などの懸念から改築を望んでいるのに対して、文化的観点からの保護運動は十分こうした懸念と要望に応じていない。また、近年のブルータリズム建築評価は戦後の歴史の中でブルータリズム建築が成立した歴史的背景を忘れ、時代錯誤的な表象や価値付けをおこなっているものも散見される。本稿では紙幅の関係で割愛せざるを得ないが、80 年代新自由主義政権下での荒涼や荒廃を描写する際にブルータリズム建築は頻繁に用いられており、これは新自由主義前夜の時代に公共部門主導の福利厚生を目的として供給されたブルータリズム建築本来の意図や歴史とは異なるある種時代錯誤的な使い方である。

テムズ川沿いの二つのブルータリズム建築
ブルータリズム建築の記憶と表象の流動性
および矛盾を示す好例として、テムズ川沿いの二つの文化政策建設を取り上げる。

画像 2, 3 : Southbank Centre/ Hayward Gallery (from:

<https://www.southbankcentre.co.uk/blog/articles/concrete-dreams-celebrating-southbank-centres-brutalist-buildings>)



1951年の英国文化祭典(Festival of Britain)の一環として建築され、それ以来関連施設の増築と統合を通じて拡大していったサウスバンクセンターは、まさに戦後イギリスの黄金期を象徴する建築である。

資料3: National Theatreの公式イメージ



これに対してナショナルシアターは1976年に竣工された晩年のブルータリズム建築であり、この様式の最高傑作であるとしてしばしば評せられる。公式資料および建築企図をみるかぎりでは、ともに「コンクリート」「灰色」のブルータリズム建築の理念に忠

実であらんとした二つの施設だが、その文化的な表象と記憶については大きな違いがある。

資料4: 観光・旅行メディアにおける

National Theatre (from

<https://www.timeout.com/london/theatre/national-theatre>)



世界的な観光情報メディアでもある Time Out による紹介写真(資料4)が示すように、ナショナルシアターにおいては、こうした灰色のコンクリート建築はイルミネーションのもとに巧みに隠蔽され、むしろきらびやかな富裕層向け文化施設として表象・表現されている。ナショナルシアターのイメージ形成において、ブルータリズム建築様式の理念と特色が後景に退くことで、ナショナルシアターは一連のブルータリズム建築ではなく、近接するグローブ座やウェストエンドの高級劇場と並置される存在として文化的に位置付けられるようになった。このように、ブルータリズム建築の記憶と表象は絶えず流動的であり、ときに称揚され、ときに隠蔽されることでロンドンの文化的イメージを形作ってきたのである。

結論

本研究を通じた成果と理論的貢献は以下の二点に集約される。第一に、イギリス建築文化研究の分野においてブルータリズム建築を取り上げ、単にその特色や歴史を論じるだけでなく、この建築様式に関する「記憶」「表象」を取り上げる点に独自の貢献がある。こうした議論は常に論争的でありその評価が定まらないブルータリズム建築の

時代とともに変化する文化的位置付けを明らかにするとともに、今日における「文化遺産保護」の対象としてのブルータリズム建築再評価論がはらむ矛盾や問題点を論じた。第二に、筆者が専門とする文化政策研究における主要テーマである「文化財保護」について、ブルータリズム建築を保護すべしとの運動や言説が含む問題点、特に歴史性の忘却による労働者階級の当事者不在の文化財称揚の問題点を指摘した。ブルータリズム建築がそもそも労働者階級向けの集合住宅・公共施設として供給された事実を踏まえると、こうした労働者階級の声を無視して、ブルータリズム建築を無批判に保護・評価する近年の動向は特に批判に値するものと言える。

参考文献

Banham, R. (1955). The New Brutalism. *Architectural Review*, December 1955.

Barwood, E. & Davies, J. O. (2015). *England's Post-War Listed Buildings*. Batford Ltd.

Hopkin, O. (2017). *Lost Futures: The Disappearing Architecture of Post-War Britain*. Royal Academy of Arts.

McKean, C. & Jestico, T. (1976). *Guide to Modern Buildings in London, 1965-1975*. Warehouse Publishings.

Philips, S. (2016). *Brutal London*. September Publishing.

BBC Culture: How unpopular buildings came back in fashion.

<https://www.bbc.com/culture/article/20140828-why-brutal-is-beautiful>

Concrete Dreams: Celebrating the Southbank Centre's brutalist buildings.

<https://www.southbankcentre.co.uk/blog/articles/concrete-dreams-celebrating-southbank-centres-brutalist-buildings>

The Times. "A Change for the concrete

city". 24 September 1988.

The Times. "Be brutal: rebuild the Southbank Centre" 8 March 2013.